ご注文は猫ですか？

峰白麻耶

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

木組みの家と石畳の町。そこは多くの野良うさぎいる。実はその町には野良猫達もひっそりと暮らしている。とある店には少ない猫達がひっそりと隠れ家としてやってくる。

そこの名前は猫の隠れ家。

そこに２年ぶりに思わぬ理由で帰省する男が１人。

そこで最後の最後まで遊んでいたのだ猫と再会する。

さて、猫の隠れ家にようこそ。

猫達を見て癒されて下さい

目　次

再開は肉球で。 ―― 1
アルバイト先も喫茶店でした ―― 9
コーヒー色の休日 ―― 18
茜色の町案内 ―― 25
一目で尋常じゃないモフモフとサラサラって気づいたよ！ ―― 37
突然の来訪者 ―― 47
家の猫も羊羹を食べるらしい ―― 55
その子はうさぎが怖いようです ―― 66
猫の隠れ家の慌ただしい平日　その一 ―― 69

再開は肉球で。

「久しぶりに帰って来たな。故郷へと」

電車を降り駅のホームに立つ。季節は寒いのか暖かいのかはっきりとしない3月。今日はどうやら暖かく、春の陽気を感じさせる。俺は海外から帰国し故郷の木組みと石畳の町に帰って来た。

本来なら今頃必死になって働いて居たのだが……ここまで言えば分かるだろう。クビになりました。考古学の研究職をしていたのだが見事に。はい、ついでに上司のミスをなすりつけられました。あのやろう、重要文献を壊しやがって。いくら俺が若くてやり直しが利くと言ってもそりゃないわ。まあ、２０だしな。

取りあえず俺の親に電話するかな。ドタバタして連絡する暇が無かったし。さて、何て言われるかと言うよりどんな反応をするか。家の親はすごく、いやかなり変わっている。

スマホをポケットから取り出し家の電話番号を打つ。電話してもでない。

「ふむ。どっかほっつき歩いてるなあの変人夫婦」

仕方なく母親の方の電話に掛ける。すると2コールででた。

「もしもし。猫屋敷ですが？」

電話からの第一声はこれだった。

「もしもし。母さん？」

「ん？その声は鈴か？久しぶりだな。」

「久しぶり母さん」

「どうしたんだ？お前が電話を掛けてくるなんて珍しい。明日は猫でも降ってきそうだな」
「そんな怪事件やめてくれよ」

猫が可哀想だろうが。想像しただけでも怖いわ

「落ち着いて聞いてくれ」
「ああ。」

恐らく落ち着いてくれないだろうが言っておかないとこっちの気がもたん

「会社、クビになった。」
「会社をクビに？」

母さんは俺と同じく呟くと黙ってしまった。普通ならここから説教なりが始まるであろう。そう、普通ならな

「鈴。あんたクビって、寝言は死んでから言いなさいよ！」
「寝言を死んでから言えるかこのバカ母！完璧なゾンビじゃねーかよ！」
「バカとは失礼な。これでも頭はいいんだぞ？」

この言動の癖に頭はいっちょ前に良い。有名なハのつく大学を卒業している。ついでに父親もそうだ。

「そう言う意味のバカじゃない！何か言う言葉があるだろ！」
「ふむ。」

母さんは受話器越しに何だか考えるような素振りをする。

「やあ！無職くん。」
「うるさいわ！」

的確にこちらの傷を抉るんじゃない。
とまあ、こんな感じの変わった親なのである。

「さて、親子のスキンシップはこれくらいにしてと」
「最も軽くしてくれよ。」
「何。まだジャブよ」

ストレート何て想像したくない。俺に取っては地獄も良いところだ

「あんたやることないなら家で馬車馬のごとく働きなさい」

両親はこの町で喫茶店をやっているのだ。

「おい。実の息子に言うことかよ」
「冗談よ。冗談。」

全く冗談に聞こえない

「まあ、半分は冗談よ。」

聞かなかった事にしよう

「そう言えばさっき喫茶店の方に電話してもでなかったけど今どこに居るんだ？」
「ん？今ハワイ。」
「は？」
「私たちちょっと世界旅行言ってくるからその間の留守よろしくね」

この婆、今なんて言った？

「世界旅行？」

「そう、世界旅行。つい、昨日。父さんが起きた瞬間に世界旅行に行こうとか言い出してね？つい、私も面白そうなだと思ったから賛成したのよ。」

あの爺。変わらねーな。決めた瞬間に行動するって言うのは変わらないな。昔それに何度振り回されたか。

「おい、その間店はどうするつもりだったんだよ」

「ん？一時閉店？でも鈴が帰って来るなら大丈夫でしょ？」

「何て行き当たりばったりな。だが、いくら何でもすぐに開店はできないぞ？いくら手伝った事はあるとはいえ厨房だけだしな」

両親２人の前職は研究職だ。母は結婚を気に辞めて父の転勤先でパートをしているが父は生物学者。しかもフィールドワークが三度の飯より好きな人間だった。

しかし事故で足を悪くし、フィールドワークが出来ないならいいやと父は何故かこの場所で喫茶店をやっている。何でも老後に２人で喫茶店をやろうと決めていたらしい。それが父だけ早まっ店の手伝いをしていた時に役に立った。しかし重度の人見知りでずっと厨房にいたのだ。今は初対面でも大丈夫だ。うむ。

「さすが。１人じゃ店を回せないとは言わないのね。」

「人間やろうと思えば何でも出来るって言ったのはどこの誰だよ。」

「私だよ。まあ、こんな話をしたけど店を開けても閉めても留守番さえしてくれればいいよ。繋ぎのバイト先も心辺りがあるから見つけてやる。家で働くかよそで働くか帰ってくるまでに決めろよ？お前

は私より人生を急ぎすぎだ。私以上に早く学校を終わらせたんだからな。１８から仕事で疲れたろ。少しはゆっくりしろ」
「ああ。んでいつ帰ってくるんだ？」
「さあ？多分最低２年は帰ってこないかも」

もう何も言うまい。この両親の破天荒ぶりは今に始まった事でない。一々これぐらいで動じていたら親子何て出来ない。

「んじゃ店をよろしく。家に集まる猫達、特によみはあんたが海外で働いてからこなくなって寂しいだろうから」
「そうなのか。わかった。」

ついでに、よみと言うのは昔俺が一緒に遊んでいた野良猫。ついでにロシアンブルーだ。何で？と思うが捨てられたのだろう。基本的に忙しい両親の変わりに俺はヨミと遊んでいたのだ。

「何か重要な事を言い忘れているような？まあ、いいか。元気でやりなよ」

そう言って電話は切られた。

なんか案外運が良かったな。取りあえずバイトをして時々店を開けると言うループをすればいいだろう。一応他の仕事も入れれば何とかなるだろう。貯金もあるし。考え事をしながら歩いてふと思う

「しかしまあ、改めてウサギが多いな」

この町はとにかくウサギが多い。町を歩けば必ず両手で数えるくらいのウサギがいて、しかも触れる。何ともウサギワールドなのだ。だが、実は猫もウサギ程ではないにしろ、多くいる。１０のうちの２

は猫だ。頑張れ猫。そんな肩身の狭い猫達が家には集まってくる。そこから家の喫茶店は猫の隠れ家と言う名前なのだ。

まあ、集まってくると言っても、厨房とお客さんには近づかないようにしつけてない猫は入れないよう隔離している。まあ、ふれあいスペースみたいなものを作って居るだけだ。まあ、猫達は自由に出入り出来るから猫が居ないときもある。俺が居るときは猫がたくさんいて俺が居ないと少ない。子供の時から猫によくなつかれる。猫が好きな俺にとってこんな幸運はない

そんなこんな俺の実家猫の隠れ家まで来た

「懐かしいな。」

レンガで作られた家。鍵を取り出し開けると2年ぶりに見た我が家があった。客席にカウンター。左にある猫が出入りするペット用の通路と仕切り。カウンターの左奥には厨房があり右奥は店ではなく家になっている。

全く変わっていない店を見ながら厨房にある冷蔵庫を開ける。

「残っているよ食材が……まあ、冷凍してるし……じゃないか。俺が戻ってこなかったら腐っていたし。見たところ賞味、消費共に大丈夫だな。コーヒーと紅茶の茶葉は後で見るとして」

厨房を出てｓｔａｆｆ　ｏｎｌｙと書かれたドアを開ける。奥にはリビング、左には2階に上がる階段がある。そこを上がり、父、母、空き部屋を通り過ぎて俺の部屋に入る

取りあえず本棚がありゲームと俺の今までやってきた趣味の物が部屋に所狭しと並んでいる。

「相変わらずの統一性がないと言うか」

荷物を置き、荷物を片付ける。服などの最低限の物としか持ってきて無く後は輸送して貰っている。最低限の物を素早く片し、疲れたので昼寝をする事にした。

にゃー。ぺちぺち

？

にゃー。にゃーーにゃ。ぺちぺち

なんだ？

にゃーーーーーー！ぺちぺちぺちぺちぺちぺち。むに

「何だよというか誰だ？」

俺が起きあがると俺のすぐ横に一匹のロシアンブルーが居た。ちょうど俺の額に猫パンチを当てている。グレーの綺麗な毛並み。青色だった目はすっかりとエメラルドグリーンになっている。ここら辺に居るロシアンブルーはあいつしか居ない。

「お前よみか？」

「にゃん！」

「お前久しぶりだなー。おい。大きくなったな」

よみ。さっきも説明したとおり、俺の親友。懐かしいな。あの頃はまだよみも子供だったのに、すっかり大人？になっている

「にゃにゃー。にゃー」

「君も大きくなったねって俺の保護者じゃないんだから」
「にゃ。にゃーーにゃん。」
「あー悪いな寂しい思いさせてな。」
よしよし。よみの頭やあごなどをくすぐって上げる。
「にゃにゃにゃーーーん。」
うん。気持ちよくて何よりだ。何で猫と会話できるか？気にするな。何でかわかるんだ。猫は友達だ。いや。友達は猫だ。

「にゃ？にゃーにゃー？」
「そりゃー。」
何で帰ってきたか？それは分かりきった事だ

「今日から俺もここに居るからだ。２年ぶりだが、よろしくなよみ」
「にゃん!!」
こうして１人と１匹の喫茶店が始まる。
さて、明日はどれだけこの隠れ家を求めて来るだろうか？

アルバイト先も喫茶店でした

ぺちぺち
ムニムニして逆に気持ちいいからやめてくれ
「わかった。起きるからやめてくれよみ。」
よみにそう言って猫パンチをやめて俺のベッドから降りる
「にゃーん」
「ん、おはよう。」
俺がそう言って頭優しく撫でるとよみは頭を擦り付けてくる。可愛いなこいつ。最も撫でてやろうかと思ったが急に離れ、よみはメールが着たことを知らせるランプが付いているスマホを床に滑らせて取ってくる。
「にゃ。」
そう言うと誉めなさいとでも言いたげにまた頭をスリスリと擦り付けてくる。こいつ俺を悶えさせる気か？可愛いじゃないかこのやろう。
俺はあぐらをかいてから膝によみを乗せて充分にもふった後メールの内容を確認する
おはよう、鈴。無職一日目の朝はどうかしら？寝過ぎないようにしなさい。あっでもよみが起こしてくれるか。小さいときもそうだったし。
本題のバイトだけど私の知り合いがやっている『ｒａｂｂｉｔ　ｈｏｕｓｅ』に行きな。そこで雇ってくれるとよ。家を回すのが無理そうならそこにいけ。

と、こんな感じだった。ｒａｂｂｉｔ　ｈｏｕｓｅか。
「うさぎでもいるのか？」
何とも単純だがそう思うだろう。うん。そこにアルバイトに行くかどうかは取りあえず
「さて、朝ご飯食べるからよみもおいで」
よみは俺の腰からよじ登り頭に乗っかる。

「にゃっにゃーーーん」
「はいはい、そんな急がなくても大丈夫だから。」
階段を下り厨房に行き軽い朝ご飯を作る。よみ用の焼き魚をグリルで焼きさらにトーストを焼いてる間にソーセージ、ベーコン、スクランブルエッグを作り、さっとインスタントコーヒーを入れる。
焼きあがったトーストにマーガリンを塗り完成。
テーブルに持って行き
「いただきます。よみは焼き魚ができるまでもう少し待っててな」
「にゃーう。」
悲しい目で俺を見てもグリルは頑張らないぞ
さてとどうしようか。バイトの件は。俺1人でもここを回せるか？といえば何とかなるが連日は体が持たない。俺は元研究職。フィールドワークばっかりやっていた体力親父とは差がありすぎるのだ。
客が来る波は手伝っていたから大体わかる。主に昼間の1～6時は客がよく入る。15の時に聞いてみたら俺の作るお菓子類が評判らしく俺のいる長期休みの間は昼のおやつの時間に客が多く入る。逆に俺が居ないと夜に客が入る。ディナータイムで作る料理が評判になる。お菓子類は俺の方が作るのが上手くそれ以外は親の方が上手い。親が甘いものが好きではなく買ってくれなかったのでやむなく自分で作ったのだ。のが上達の原因で親の敗因でもある。親も作るが店に何とか出せるって感じなんだよな。
ついでに若干猫カフェ成分が入ってるので猫に触れている客にも目を光らせないといけない。プラス、料理、接客をしないといけない。正直よくよく考えるとピーク時は回らないのだ。俺があの親父の体力を持ってないかぎり。せめて接客が1人居れば何とかなるんだかな。
「よし決めた。ｒａｂｂｉｔ　ｈｏｕｓｅで働こう。」
俺のやろうと思えば何でもできるは体力と言う切実な問題の前で儚く砕け散った。

★★★

朝食を食べ終えて少しゆっくりしてから俺はｒａｂｂｉｔ　ｈｏｕｓｅに出かけた。一応言く前に電話をしてマスターである香風タカヒロさんには私服で言いよと言われてるため私服できた。黒のズボンにワイシャツ、ブレザーだ。そして横には保護者見たくよみが付き添っている。

スマホで検索をしてその地図を頼りにｒａｂｂｉｔ　ｈｏｕｓｅの所までくる。うさぎがカップを持っている看板を見るととやはりうさぎがいるのか?家は猫がくるまって寝てるやつだけど。

うさぎがいるかと期待してドアを開けるカランコロンとベルがなる。店に入って見回すとやはりうさぎは居なかった。と言うより人が居なかった。

「すいません。いらっしゃいませ。」

と思ったら声が聞こえた。落ち着いた少女の声と同時に厨房とおぼしきところから薄い青色の髪の女の子が出てきた。その子の頭の上には白いモフモフとした物体が乗っかっていた。そのモフモフは少女がカウンターを通るときに頭から飛び降りカウンターに着地していた

あれはアンゴラうさぎか?と言うか本当にうさぎ居たし

俺の所まで来ると

「お好きな席にどうぞ」

といってカウンターまで下がってしまった。

ちょっと待て聞きたいことが聞けてない。

「すいません。香風タカヒロさんはいらっしゃいませんか?猫屋敷と言うものですけど」

少女は一瞬間があったが思い当たることがあったのだろう

「あなたが猫屋敷　鈴さんですか。話は父から聞いています。服があるので着いてきてください」

そう言われたので少女について行く。父から聞いていると言って

いるがあの母親がどんな風に説明しこの子の父親に伝わっているのかと思うと気が気ではない。けど今は仕事に集中だ。ここをクビにされたら俺は引きこもる自信がある。
「所で猫屋敷さん」
　少女が店の奥の扉を開けるときに振り向き俺に声を掛ける。
「なんですか？」
「猫屋敷さんの足下に居る猫は…？」
　少女の視線の先にはよみが居た。
「おい、何で店の中に入ってるんだよ」
「にゃにゃなゃん。」
「いや、そうであったとしても店まで入ってこないし、過保護すぎだろ。」
　よみが言ったのを翻訳すると保護者だからだと。
「取りあえずあそこにいるモフモフにでも遊んで貰え。」
　俺はカウンターに座って少女を見守っているモフモフも指した。
「にゃーーん？にゃにゃん。」
　よみはそういうとモフモフめがけて一直線に走っていった。それと同時にモフモフが跳ねながら逃げていく。
「すまんな、モフモフ。お前の事は忘れないよ。」
「モフモフではありません、ティッピーです。後ティッピーを勝手に死なせないでください。」
「ごめんなさい。」
　テヘペロ。何となく言ってみたかったんだ。
「それにどうしてね「のおおおおーーー。」ですか？」
　え？今のダンディーな声はなんだ。周りを見回してもここには俺と少女によみとティッピーしか居ない。
「えっと香風？でいいのかな？」
「すいません。自己紹介がまだでしたね。香風智乃です。紛らわしいのでチノでいいですよ」
「それなら俺も名字呼びじゃなくていいぞ。猫屋敷何て噛まないだろうけど長いからな」

少し言葉を砕けさせたがいいだろうか。こっちの口調が堅いとチノもつられるだろうからな
「わかりました。鈴さん。なんですか？」
「さっき物凄いダンディーな悲鳴が聞こえたんだけどあれってティッピー」
「腹話術です。」
「……」
無言の視線をチノに寄せるが、目をそらさない。
しかし時間とともに少しずつそれていく。
「明らかにあれティッピーじゃ」
「私、腹話術が得意なんです。」
まあ、ここまで言わないのならそれ以上は追求しない
「それでさっきチノが言い掛けたのって何で猫と話してるか？」
「そうです。」
「単純に猫の言ってることがわかるがってだけなんだよな……。」
人よりも正直猫と話すことが多いのだ。いつの間にか猫の言ってることがわかるようになってきた
「すごいですねそれは。しかも羨ましいです。私ティッピー以外の動物には懐かれなくて。」
この野良うさぎが多くいる町で動物が好きなのに好かれないというのは大分悲しい体質だな。俺は動物、特に猫に好かれる。わかりきってるか
「猫なら触らせてやれるかも知れないぞ？」
「え!?本当ですか!!」
よみはロシアンブルーで人見知りであるが、子供にはめっぽう弱く仕方なく触ることを許すことが多い。
まあ、逆に大人に対しての警戒が強いけどな。チノは恐らくうさぎを触りたいのだろうが、動物ならいいのだろう。これを気に猫好きになれば俺もうれしい
「よみだけじゃなくて町にいる野良猫達もお願いすれば触らしてくれるだろう」

「この町って野良猫居るんですか？」
　チノは初めて知ったようだ。まあ、それもそうか。
「少しね。それも路地とかうちの店にいるから見たことがあるって人は少ないかもね。」
「家の店って？」
「実家が喫茶店なんだよ」
「それなら家ではなくそこで働けばいいのでは？」
　チノの疑問はもっともだろう。
「なあ、チノ。チノは1人でこの店を回せるか？それも1日中朝から夜まで」
　チノはその光景を想像したのかぞっとしたような顔で
「無理ですね。倒れちゃいます」
「そう言うことだ」
「ご両親はどうされたんですか。」
「親……か。世界旅行に行ってるぞ」
「世界旅行って……自由なご両親なんですね。」
「自由過ぎて困る」
　そうこう話している内にチノは目的の部屋に着いたのか止まっていた
「中の部屋にバーテンダーの服が入っているのでそれを着てください。着替え終わったら下に来て下さい」
　チノはそう言って一階の方へ降りていった。
「んじゃ。俺も早く着替えるか」
　俺も早速着替えてみる。意外といい。と言うより研究職だったから白衣とかスーツの方が多かったし手伝いの時も厨房だったからこういう喫茶店の制服は着たことがない。着こなしがおかしくはないかを確認して一階へ降りる
　そうするとチノともう1人紫色の髪をツインテールにし制服に身を包んだ子が居た
「む!?くせ者か！」
　その少女はチノを後ろに庇い懐から拳銃を出す。

「いや、初対面の人間にいきなりモデルガンを出すなよ」
普通の人ならびっくりするだろうが本物をアメリカで見たことがあるしおもちゃかそうでないかの見分けはつく
「そうですよリゼさん。この人は新しく入る猫屋敷　鈴さんです。」
チノがそう言うと拳銃を制服にしまい、椅子舞いを正して
「そうだったのか。早く行ってくれればよかったのに」
リゼがそう言うと呆れたようにチノは
「紹介する前にリゼさんが拳銃を出したんじゃないですか」
「すまんすまん。ついな。」
つい拳銃を向けられる俺っていったい何なんだろうか
「天々座　理世だ。よろしくな。噛むだろうからリゼでいいぞ。私も勝手に鈴って呼ぶし」
「わかった。よろしくなリゼ」
「ああ。」
「そう言えばチノ。来る途中にティッピーが猫に追い帰られて泣いていたような気がしたんだが。あれは大丈夫なのか？」
「……鈴さん」
ジト目でこちらを睨んでくるが、攻められているような感じがしない。むしろかわいいが
「すまなかった。今度は手加減するようによみにいっめおく」
「はあ、そういう問題ではありません。まあ、何時も私の頭に乗っているので少しは運動した方が良いのかも知れませんが。あっ。リゼさんお客さんをお願いします。私は鈴さんに説明するので」
「わかった。まかせとけ。」

そうしてリゼは接客に動く

「鈴さんは基本的に接客です。コーヒーを入れるのが私で調理はリゼさんです。」
「わかった。」
「レジの使い方は分かりますか。」

「分かる」
　店が終わった後にレジで遊んでいたことがあったからな
「後メニューも徐々に覚えてください」
「メニューはどこにある？」
「ここにあるぞ」
　俺がメニューの場所を聞くとリゼがメニューを持ってきた
「おっ。ありがとうリゼ。」
　メニューを開き5秒見つめた後もう一度開いて見る
「ありがとう、覚えた」
「すごいですね。リゼさんと同じくらい早いです」
「いや、私もここまで早くは覚えられないぞ」
　そんな会話をしているとお客さんがきた。さて、働く、もとい接客しますか
「いらっしゃいませ、お好きな席にどうぞ」
「あら、新しく入ったバイトさんですか？」
「今日から働く事になりました」
「そうなの。それじゃ、ブルーマウンテンお願いします」
「かしこまりました」
　俺はオーダーを聞きカウンターまで下がるとチノに注文を言う。
こうしてｒａｂｂｉｔ　ｈｏｕｓｅの初日は終わっていった

「お前、なかなかやるな」
「飲み込みが早くて助かりました」
　今日は客入りが多かったらしく助かったみたいだ
「まさか、鈴が料理ができるとは。しかも私より手際よくやってるかは負けた気分になるな」
「はい、私も予想外でした」
「暇潰しに料理は持って来いだからな。」
「何がともあれ、戦力が大幅に上がったな。」
「そうですね。回転が明日からも早くなるでしょう。今日はお疲れ様でした。」

「ああ、お疲れ」
「お疲れ様」
俺はさっきの部屋に戻りバーテンダーの服を返す。部屋から出ると男性がいた。
「もしかしてあなたがタカヒロさんですか？」
「そうだよ。」
「初めまして。猫屋敷　鈴と言います。よろしくお願いします」
俺はお辞儀をすると
「ああ、こちらこそよろしく。君の親からは聞いたよ。災難だったね」
「ええ、まあ。」
「君が新しい職を見つけるまでここにいてもいいよ。何ならここに就職するかい？」
「今は何とも言えないですね。」
嬉しい提案だが1日で決めるのも良くない。取りあえずいろいろやってみよう。
「そうか。チノが初対面であそこまで話せるの人は居ないからね。これからも仲良くしてやって欲しい」
「それは、勿論ですよ。所で気になったんですが俺の親とどんな関係で？」
「学校の先輩で幼なじみだな。」

両親とタカヒロさんの意外な関係がわかって今日は終わった。家に帰るとよみが満足げに尻尾を振るっていた。

コーヒー色の休日

この町で過ごすのも一週間が過ぎ頭に仕事中にティッピーが乗っていることや同じく俺の頭にもよみが乗っといていることたまにティッピー喋ることに違和感が無くなり、この町にも徐々に慣れてきた。

俺は主に仕事はコーヒーを入れる以外は殆どやっている。コーヒーを入れるには経験が完璧に足らないからだ。知識は詰めたがそれで手が動くならどれだけ幸せだろう。

今日はｒａｂｂｉｔ　ｈｏｕｓｅは実は休みだ。しかし今日はチノ主催のコーヒー教室が行われていた。これはチノに前々からそろそろコーヒーに触れてもいいてでょうと言わていたのだが知識不足だったために断っていた。そして一週間たち入れ終わったところでチノにコーヒーに淹れ方を教えて貰っていた

「まずは復習です。コーヒーを入れるときに挽く時は必要な分だけです。それは何でですか？」

チノがコーヒーミルで豆を挽きながら俺に尋ねる。俺は前に読んだコーヒーの本を頭の中に広げ該当箇所を見つける

「湿気と酸化。挽くことに豆が空気に触れる表面積が広く成るから水分を吸いやすく酸化し易い」

俺は本で書いてあったことを軽く要約してチノに説明する。

「そうです。豆の時は湿気がない地下の暗室とかが望ましいですね。それでは今日は実際にコーヒー淹れてみましょう」

「はい！教官！」

「鈴さんまでリゼさんみたいに成らないで下さい。教えませんよ」

「わかったよ先生」

そう言うとチノは軽く頬を染め先生……悪くないですねと呟くとコーヒーを入れる準備に入った。

「何時も私はサイフォンでコーヒーを淹れてますが今日は基本的な入

れ方のペーパードリップからやりましょう」
　チノはカウンターにドリップパー、ペーパーフィルター、サーバー、メジャースプーン、ドリップポットを用意する。
「まずこれらは予め温めておきます。お湯の理想的な温度は沸騰したときのゴポゴポが収まったくらいが理想です。そしてその最適な温度の水がこれです」
　何分クッキングだよ。都合よすぎだな。
「ここからはわたしの指示にしたがってお願いします」
「了解」
「コーヒーフィルターの底の接着面を外に側面の接着面を内側にしてドリッパーに軽く押さえつけて下さい」
「こうか？」
　俺はチノに確認のため聞くとおっけーです。と頷き次の行程へ
「次にさっき挽いた豆を入れて下さい。この時表面が平らになるようにして下さい」
「あいよ。」
　この行程はさらっと終わらせ次に
「次にコーヒーを蒸らします。」
「蒸らす？」
「はい、コーヒーとお湯を馴染ませるんです。そうすることでコーヒーを美味しく飲めます」
「おお。凄いな。馴染ませるという事は少し淹れればいいのか」
「そうです。それから２０秒ほどたったら小さくのの字を書くように三回に分けて淹れて下さい。」
　チノに言われた通りに淹れていく。確か端っこに残っている粉は取らない方がいいってテレビにあったよな。確か満遍なく抽室出来ないってあったな。
　そんな感じで淹れたコーヒーをチノに渡す。
　チノはにおいをかいだあとに砂糖とミルクを入れて一口のむ
　チノって砂糖とミルクが必須なんだなー。こういう所が年相応だな。うん、可愛い。そんな事を考えチノを見守ると

「まだまだですね。」
　と何とも予想道理の展開だった
「だよね。一朝一夕で身につく技能でもないからな。地道にやっていくよ」
「でも段々と良くなっています。鈴さん色々と飲み込み早すぎませんか？一応店に出す最低ラインは今日でクリアです。」
「え？本当？」
「はい、今日で私のコーヒー教室は終わりです」
「何……だと。このコーヒー教室楽しかったのに」
　何というのだろうか？それこそ兄妹が居たらこんな感じなのだろうか？知らんけど
「え？え……ええとその私もその……鈴さんと一緒にコーヒー教室出来て楽しかったです。」
「よかった。俺だけ楽しかったとか思ってたら泣く自信がある」
　さめざめと泣く振りをするとチノはあきれたように
「何言ってるんですか。私も楽しかったって言ってるじゃないですか……まったく同じ事を二度も言わせないで下さい」
　チノさん。あなた結構恥ずかしいセリフ言ってるよ？デート終わった彼女のようなセリフだよね。何かの罰ゲームでデートに行くことになった男女が帰り際に言いそう。コーヒー教室を買い物とか遊園地とかのデートスポットにすればまさに正統派だよね。
　もしかしてチノは若干天然が入ってるのか？それともデレたのか？それは神のみぞ知る
「そうか、ありがとうな」
　そう言うと自然と手がティッピーの頭に動きナデナデしていた。その時間約３秒。
「とっ。ごめん。」
　俺はとっさに手を引く。結果的にはティッピーをなでだがチノを撫でようとしたのは変わりないからな。
「い、いえ。そこまで嫌な感じはしなかったので」
　返答がおかしい。ティッピーとチノはドッキングしているのか？

まあ、嫌な感じがしなかったならいいや。
「そうか」
「はい……」
とここで会話が途切れ静かになる。
さて、ここでみんなに質問だ
こういう時に俺はどうすればいい。
俺は人見知りは改善したがまだ軽いコミュ障が残っている。ついでに目は腐ってない。
俺はどうしようかと考えた。
「クゥーー。」
ん？今のはお腹の音？俺じゃない。つまりは……とチノ？
「わ、私ではありません！い、今のは……そ、そう。ティッピーです。」
「ワシではないぞ！チノのムグムグムク」
「うう、おじ……ティッピーは黙っていて下さい。」
やばい、ちょっと笑いが……我慢できそうにない
「あはははは。だめ、我慢できない。」
俺は３０秒くらい笑い続けようやく収まると膨れっ面のチノが居た。
「ごめんってチノ。ちょっとタイミングが良すぎて」
「そんなのは笑う理由には成りません。」
ツンと突き放すとそっぽを向いてしまう。
「ほら、チノの好きなチョコレートパイ作って持ってきてるから」
とさっきのチノのお腹の音で思い出したチョコレートパイを出す。
「う、うう。」
ちょっと誘惑に引かれている。だって目線がチョコレートパイにチラチラ言ってるし。後一押し
「そうか、チノは食べないのか。仕方ないティッピー一緒に食べよう」
「そうじゃの。お主の作るお菓子は旨いからな。」
そう言うとチノの頭から跳ぼうとするがチノ寸前の所で抑える
「し、仕方ないですね。今回は許してあげます。別にチョコレートパイにつられたと言う分けじゃないですし、お腹が空いたわけでもあり

ません。ちょうどおやつの時間だからです。」
　チノはさっさと皿とフォークを用意する。
「後、鈴さんには罰ゲームで苦手なコーヒーを飲んで貰います。」
「え？」
　俺、いつチノにコーヒー嫌いと思われていたんだ？
　チノは俺の返答が予想外だったのか
「違うんですか？何時も甘いお菓子を持ってくるし何時もコーヒーではなく紅茶なので」
　と理由を説明するが
「単純にそう言う気分なだけだったんだけど……」
「は、恥ずかしくて穴があるなら入りたいです」
　チノはそう言って顔を隠す。
「入ったらチョコレートパイ食べられないけどね。」
　そう言うと俺は切り分けたチョコレートパイをチノの皿に寄せるとチノはコーヒーを3人分持ってくるし。1つはティッピーのやつらしいくストローがある。
「それではいただきます」
　チノは両手を合わせるとチョコレートパイをフォークで切って頬張る
「んん。おいしいです。鈴さん本当にお菓子作るのが巧いんですね」
　俺もチョコレートパイを食べる。サクサクの生地の食感にチョコレートの甘さ。時間がたっているため冷めてるのは残念だが美味しい
「親が甘いもの苦手で買ってこなかったんだよ。だから仕方くらい自分で作ることにしたんだ。幸い時間は有り余っていたからね。」
「それでここまで出きるのは凄いですよ」
「よく考えろ。中学生で親を手伝っているのが凄いぞ。俺がその年の時俺は大学行っていたし」
　チノは俺の言葉に疑問符を浮かべる。あーそう言えば飛び級制度は日本に無いのか
「俺は両親の都合で海外を転々としていたんだよ。その時に飛び級し

てその時には大学言っていたんだ。ついでにこっちにも長期休暇しか帰ってきてない。」
　チノは感心したように頷き
「鈴さんもしかして頭いいんですか？」
「飛び級してるからね。」
　新たに疑問を見つけたのかチノはこう聞いてきた
「鈴さんって今何歳何ですか？そう言えば聞いていませんでした」
　もしかしたらタカヒロさんは俺がここにいる理由を誤魔化してるのだろう。まあ、バレてもいいか。

「１９だ。」
「？大学も飛び級したんですよね。」
「そうだ。」
「それなら空白ありますよね。その間どうしたんですか？」
「一気に説明すると働いていたんだけど上司のミス背負わされてクビになったんだよ。」
　それと言葉を聞いてチノは青ざめる
「すいません。嫌なこと思い出させて」
「何言ってるんだ？俺はクビになってよかったって思ってるんだが」
「え？」
「俺は前の職場は随分と嫌われていたんだ。飛び級って言う制度があってもイレギュラーはイレギュラーだからな。それに仕事の環境も良くなかったから。今と前を比べるなら断然今の方がいい。色々とすっ飛ばしたものを埋められている感じがしてな。」
　大学時代は大人が多かった。それ故に接することは出来るが一歩引いたり露骨に嫌がる者もいる。
　だから今のリゼやチノの関係は嬉しいのだ

「鈴さん……」
「だから気にするな。そうだな……それでも気にするならまた、コーヒー教室開いてくれよ。楽しかったからな。」

チノは俺がそういうとハッキリと
「はい！」
と言ったのだった。

茜色の町案内

チノのコーヒー教室から1週間が過ぎていった。休日を満喫するために俺は惰眠を貪っていた。

時計は見えないから分らないが、大体今は11時位だろう。今日は1月まで寝るつもりだ。よみはどうやら町をふらついているようで起こしに来ない。

つまり惰眠し放題。猫は言いよな。餌さえ何とかなれば、日向でずっと寝れるんだから。人間は大変だよな。働いて働いて働いて働く。それ以外は最低限度。ついでにこの生活は俺の研究者時代の話だ。労働時間長いんだよな。

今日は惰眠を満喫した後に本を読むつもりだ。これぞ正しい休日の過ごし方。

二度寝最高と思いながら再び意識を手放そうとすると

「おい。起きろ」

誰かの声がする。

「鈴。もう昼になるんだぞ！いい加減起きろ！」

そう言われて俺の布団がバッと剥がされる。

「ん。後3光年」

「それは速さの単位だろ！」

目をこすりやっとの事で目を開けるとなぜかリゼがいた。私服である。ボーイッシュな感じで何ともリゼにあっている。

「リゼ。取りあえずそこにある俺のスマホを取ってくれ」

「？ああ。わかった。」

リゼは充電機から俺のスマホを取り俺に渡す。俺は電源を点けて、3つの番号を押す。どこかって？

「もしもし？警察ですか？不法侵入なんですが？」

国家権力だ。

「おい。リゼ。俺はお前のお陰で二次元と三次元の区別が付かなく

なった残念な人にされたじゃないか！」
「それは私のせいなのか？」
　電話の内容はこうだ
「すいません。家に起きたら知らない人が。」
「特徴は？」
「女の子で高校ぐらいで紫のツインテールです」
「…。そりゃあんたの幻覚だ。そんな事がない。あんたあれだ。アニメの見過ぎだ。こっちに戻ってこい。何なら良いところ紹介するぞ？」
「……ガチャリ」
「これは俺悲しんで言いよな」
「お前が約束を忘れて居そうだから来てみたら案の定寝てるからだ」
　約束？リゼと？
「お前。本当に忘れてたのか。」
「待て、どうして俺の家を知っている」
　俺がここに住んでいることを知っているのはタカヒロさんとチノだが……
「チノに教えて貰ったんだ。けど途中で迷ってな。そうしたら鈴の飼い猫のよみに会ってな。ちょっと聞いてみたら案内してくれたんだ。よみって賢いんだな」
　あいつ。案内ついでに俺を起こさせようとしたな
「リゼ。鍵はどうした。」
「ピッ……。秘密だ」
「おい。今ピッキングって言おうとしたろ。普通に不法侵入じゃないか」
　それより約束か……あっ。もしかして町案内か？でも
「しなくていいって言ったような気がするんだけど」
「え？そうだったか？」
「確か、家からｒａｂｂｉｔ　ｈｏｕｓｅの道のりさえ分かっていれば良いって言ったような気がするんだけど」

確か町案内するって言われたのが3日前。お使いを頼まれてリゼに口頭で説明された後放り出され迷子になったんだよな。それで謝られて町案内するとリゼに言われたのだ。
「そ、そう言われるとそんなの気がしないでもないな」
「だろ？」
「だが！それにしてもこんな時間まで寝てるのは不健康過ぎる！運動だ！外を散歩するついでに町案内してやる！」
「えー。後二時間ほど寝て、その後本を読むつもりだったのに」
「睡眠時間の多さは別にしてチノと鈴は趣味が似てるよな……。」
「言われてみれば確かに」
チノの趣味はチェスとボトルシップにパズル。老後のおじいさんみたいな趣味だ。対して俺は読書。完璧なインドアだ。
「ほら、さっさと着替える！」
「はいはい。だが、リゼがここに居ると着替えられないんだが？」
「そ、そうだな。」
そう言うとリゼはそそくさと部屋を出て行く。
仕方ない。今日はリゼについて行きますか。
俺は何時もどうりの服を手にし着替えてから部屋を出る。するとドアの前にリゼが立っていた。
「待たせたリゼ。散歩行くか」
「ああ。ってお前何も食べてないけどいいのか？」
「ご飯なら外で食べればいいだろう。」
「それもそうだな。それよりも」
リゼは俺を頭から足まで見る。
「なあ、服が2日前と殆ど同じような気がするんだが……」
「やっぱりここまで時間たつと分かるよね。服は最低限度しか持ってないんだよ。」
「それにしても少ないだろ。上と下で二種類しかないだろ」
「ピンポン。正解」
パチパチと拍手をする。流石女子。こう言うところには鋭い。と言うか細かい。

「正解じゃないだろ！何でなんだ」
「いやー。前の会社がとてもブラックで……休日返上ってやつ？あってもずっと家にいるからな……外行きの服はこれで十分だったし」
「年頃の男がそれでいいのか？」
まあ？確かに？この年だとここでは大学生。おしゃれにも気を使う男が多いだろう。彼女が居るリア充はなおさら。
俺の場合。オシャレ？何それ美味しいの？服の金が掛かるだけだ。それなら別の物を買う
「いいんだよ。それよりも年頃の女子高生が拳銃とコンバットナイフを持っていていいのか？」
「う、うるさいな！持ってないと落ち着かないんだよ！それよりも！鈴の服を買いに行くぞ！」
恥ずかしい表情を顔をブンブンと振り落ち着かせ、話をそらすように言う
「何でだ？」
「それは前はスーツとかでも良かったのかも知れないが今は私服だろ？ある程度は買った方がいい。」
「それはそうだろうが……お高いんでしょ？」
某通販のように返す。が返答は予想外だった
「お金が無いならかすぞ？」
「ふざけてすいませんでした。流石に２つ年下にお金を借りるほどクズではありません」
俺にも一応年上のプライドはある。まあ、殆ど捨ててるけどね。しかしこうも簡単にお金を貸すと言えるのは凄いな。俺なら絶対言わないぜ。
「クズって……別にお金自体を借りることは悪くないだろ。」
「俺の残り少ない年上としてのプライドなんだ。わかってやってくれ」
「年上な。２つ上ってことは１９か？」
リゼは俺の年齢を口にする。次の質問は大体分かるので先取りで説明しよう

「そうだ。ついでに海外に居て飛び級して会社に居たんだがクビにされ今に至る」
「あっああ。すごいことをさらっと説明されたのだが」
とリゼは困り顔だ。
「気にするな。」
今は何とか成ってるしな。それで十分だ
「まあ、お前がそう言うなら」
とちょっとバツが悪げだ。
俺はリゼの手を取りさっさと行くことにした。ドアを開けてリゼを引いて外に出る。リゼは前のめりになりうまく歩けない
「ちょ、おい。いきなり手を取るなびっくりするだろ！」
リゼは顔を赤くし俺に抗議する。だが、俺は悪くない。気にせず突き進む
「だったら手を引かれないようにちゃんと歩けー」
「止まらないと歩けないぞ！」
「それもそうか」
リゼのとうりだな。そう思ってリゼの手を離す。
するとリゼはバランスを崩し、倒れそうになる。
「っ！」
「おっと。すまん。俺の不注意だったな」
ラブコメなら主人公もろとも倒れて、男が胸を触ってモミモミすると言う王道パターンだ。
しかし、俺は主人公気質ではない。モブだモブ。
リゼの肩を両手で柔らかく受け止め衝撃をなくし真っ正面から受け止めキャッチ。胸を当たらないようにする考慮も忘れない。流石俺、マジ紳士
嘘です。紳士は女性の手を強引に引きません。いくらさっきの事から気をそらすようとしても。
「リゼ。大丈夫か？」
リゼは抱き止められた体制から顔を上げ上目使いに
「ああ…。大丈夫だ。怪我は無い。ありがとう」

「悪いな。配慮が足らなかった」
「いや。鈴がさっきの事を気にしないようにとしてくれたことだろう？なら。礼を言うのはこちらだ。」
　と言い少し目を逸らすと少しどもりながら
「それと……いきなり手を握るのも止めてくれ。その……男の人に慣れてなくてびっくりするし恥ずかしいから」
　恥ずかしいか……。その気持ちは分かるぞ。俺もその気持ちは分かるからな。
「リゼ。それなら腰に回している手を離してくれ。周りの視線が……」
　今の体制は俺がリゼの肩を受け止めていてリゼの手は俺の腰の後ろ。簡単に言うと抱きつかれているのだ。
　そのお陰でカップルに向けられる微笑ましいものを見る視線が痛いのだ。
　リゼは今の体制を確認した後に周りと見渡すと状況を飲み込むと猫のように跳んで下がる
「す、すまない。う、うう。速く行くぞ！」
　そう言って急に振り返り早歩きでリゼは先に言ってしまった。振り返るときふわりとなびく髪から覗く耳が赤くし染まってるのは恐らく見間違いではないだろう。

「服屋に言く前にご飯だ。」
　リゼはそう言うと服から何かを取り出す
「なんだそれ？」
「レーションだ。」
「ああ。軍隊の携帯食料か、なつかしい。知ってるか？携帯食料……まあ。保存食はフランスのナポレオンが民間に開発を要請したんだぞ。軍隊は胃袋で動くってセリフも残している。」
　リゼは俺のこの無駄知識に感心するように話を聞いていたが急に顔を引き締めると

「そんな事を知ってるとは……貴様もしや軍の人間か!?」
「んなわけあるか!研究所の保存食に置いて合ったんだよ。その消費期限が近くなって所員全員で休憩の時に食べてたんだよ。」
　あの時は所員全員が美味しくないと言いながら食べていた。だが、あれを食べた後に何時ものご飯を食べると凄く美味しく感じるんだよな。
「そうだったのか。だったらほら、思い出の品だ」
「ありがとう」
　俺はリゼからレーションを受け取り食べる。味よりも懐かしさの方がこみ上げてくるな
　俺はさっさと食べてしまうと近くの自販機からココアを二本買ってリゼに渡す
「鈴。ありがとう。お金は……」
　といってリゼは財布を出す。俺はリゼの財布を取って強引に鞄に戻す
「ついでだよついで」
　その笑顔は１２０円以上の価値はある。やだ、主人公ぽい。でもその笑顔を見れただけで充分さって言う方が主人公だよね。
「そうか。ならありがたく貰うよ」
　リゼが両手でココアの缶を持ち口に付ける。と俺もココアを飲む。この程よい甘さがいいな。春の風を感じつつ味わいながら飲む。５分後に飲み干し缶を飲みをしリゼも飲み終えたのを確認すると
「服屋に行くか」
「そうだな。」
　その服屋はその場所から１５分歩いたところにあった
「なあ、リゼ。何でこんなガチっぽい所なんだ。俺は最も緩い所を想像していたんだが」
「せっかくだ。私もついでに春服を買いたいからな。両方揃えている所にしたんだ」
「場違いな気がするから止めてくれ。」
「気にするな。慣れるから。行くぞ」

俺はこうして地獄に入っていく
「いらっしゃいませ」
「すいません。コイツよ服を数着選んで頂けることはできますか？私も春服を選びたいんですが１人で選ばせるとろくな物を買わないと言うよりここから逃げそうなので」
店員さんは軽く俺を横目で見ると
「かしこまりました。彼女さんが惚れ直すようなコーディネートを出来るようにがんばりますね」
「か!?彼女!?」
「あのー。俺達はそう言う関係じゃありませんが」
「あらあら。彼女は可愛い反応をしてくれるのに…。でもこれはこれでありかしら？」
そう言うとリゼを他の店員に託し俺はからかわれた店員に連れられた
「予算はどれくらいですか？」
俺は財布の中身を確認し諭吉さんが十枚入ってるのを確認。だいたい五万でと言うと
「わかりました。んー？灰色の髪に目。身長は約１６８ぐらいですか。要望とかあります？」
「ならべく安く。派手なのは却下でお願いします」
「あー。確かにそう言うの似合いませんよね。お客さん。眠たそうな目をしてますもんね。あと雰囲気にもあいませんし。落ち着いた雰囲気ですもんね。わかりました。ちょっと持ってきますね。」
店員はさらっと服の森に姿を消す。この中でも俺に合う服を見つけられるのか

十分経過すると店員さんが戻って来た。
「お待たせしました。こんな服はどうですか？」
そう言って広げられたのは、ワイシャツとカーディガン、ブレザー。ワイシャツは俺が今着ている制服のシャツみたいな物ではなく、しっ

かりとしたオシャレなやつ。と言っても派手ではなく黒、青、白、赤。青と赤は暗色ぽくなっている。で所々にラインが入っている。
カーディガンは黒と白。模様が入っていてなかなかいい。
ブレザーは黒、白。
最後に薄い黒Tシャツが数枚
ブレザーは居るかどうかは分からんが必要なくても来年があるだろう。いや、秋にも着れるか

「いいですね。合計いくらですか？」
特に嫌な要素は無かったので買うことにする。
「5万と6千何ですが……。すいません。少しオーバーしてるのですが」
「良いですよ。」
俺はそう言って6万を出す。
「おお。お客さん太っ腹。サービスにこれを贈呈します」
そう言うと店員は羽を催したペンダントをくれた。
この時店員が何故か満面の笑みだった
「そうだ！どうせなら着て行ってください。そうすれば少しは値引きますよ？」
「本当に？」
「本当に本当」
「着替えます。」
「ありがとうございます。はい、お返し分です。それではこちらにどうぞ」
案内された先で俺は白のワイシャツの上に黒のブレザーを着て外に出る
「おお。お客さんやればできるじゃないですか！彼女さんもびっくり。私も予想外に驚きです。服に着られている感がない」
店員さんのテンションが高い。が取りあえず好評のようだ。
「それでは彼女さんこっちに居るのでどうぞ」
「もう面倒だからツッコミません」

俺は店員さんに連れられさっきリゼを連れ去った店員の所に来るが
「リゼ？」
「似合わないなら似合わないってはっきり言ってくれ。」
リゼは何時もの服とは異なりかわいい系のふわふわとしたスカート部分にフリルがある白の服に上からピンクのカーディガンを羽織って着ていた。髪は店員さんが合うようにしたのかツインテールではなくロングになっている
普段の雰囲気とは違いお嬢様と言う感じで普段とのギャップもありよく似合っている。
が素直にそれを言えるほど俺のメンタルは強くない
「似合ってなければ今頃笑っているだろうな」
「え？」
リゼは言葉の意味を理解するため考えているが、店員さんはくすくすと笑い微笑ましげにリゼを見ている
リゼは内容を理解したのか俺が笑ってない事を確認すると
「そ、そうか。似合っているのか。……鈴もなかなか様になっているぞ」
頬をかいて照れてわらっている。そんな表情されるとこっも照れるから止めてくれ。店員さんの視線が……
「素直に可愛いって言えないかー。やっぱり」
「ねえ、あの子さっきの人よね。変わり過ぎじゃない？」
「そうよね。私も出てきたときびっくりした」
「イケメンと言うほどでもないんだけど……」
「何か密かに思われそうなタイプってかんじ？」
「そうそう。」
「はあ。彼氏欲しい」
店員さん２人ファイト。
２人の心の叫びを聞いて俺達は外に出た。

そこからお茶をしたり公園でうさぎをもふったり、安いお店などを紹介して最後に夕日が綺麗だと言う橋まで来た。

「おお。凄いなこれは」

オレンジ色の光が町を人々を柔らかく照らし橋の下の水が光を反射しきらきらと輝く。

長らく見ていなかった優しい風景

「そうだろ。私のお気に入りの場所だ。鈴に見せたくてな。」

「確かにここはいいな。故郷にこんな風景があったとは」

「ここが故郷なのか？」

「そうだ。まあ、生まれた時と長期休暇以外海外に居たから」

「そうなのか。海外はどんな感じなんだ？」

俺は思い出す。

「特にない。何か愛着がわくまえに引っ越す転勤族だからな。ロシアが一番長くいだけど仕事で手一杯でこうやって景色を見るほどの余裕がなかった」

「今はどうなんだ？」

リゼは橋に寄りかかって景色にを見るのを止めてこちらを向く。

「今か……。凄く楽しい。年が近い友達？が２人もできてこんな風に遊んで働いて何て無かったからな。作る前に引っ越すからなあ。落ち着ける居場所が家だしな」

「お前の居場所は今も家なのか？」

俺は考える。

「今は一番落ち着くのは家だな」

「そうか」

リゼは落ち込む

「これから俺が海外に行かないかぎりはな」

「え？」

リゼは顔を上げて戸惑っている。

「俺のより所が家なのは友人がいなくてと引っ越し三昧だからだ。でも今は違うと思っている。俺自身は」
リゼは言葉の意味を理解したようだ。俺は今引っ越しはしてない。海外にも行かない。ｒａｂｂｉｔ　ｈｏｕｓｅで働いているからだ。俺がさっきリゼのことチノを友人と言っているつまり
「そうか。お前は素直じゃないな。素直にｒａｂｂｉｔ　ｈｏｕｓｅが時間がたてば居場所になるかもって言えよ」
「仕方ないだろ。そういう性格なんだ」
俺の返答を肯定と受け取ったのかリゼは嬉しそうに笑顔を浮かべる
その笑顔は何とも夕暮れで茜色に染まる町に合っていた

一目で尋常じゃないモフモフとサラサラって気づいたよ！

３月の終わりに入り春休みもあと残り少しのようだ。俺は関係ない。何時もｒａｂｂｉｔ　ｈｏｕｓｅで働いて居るからな。学生の頃って……二年も前の話だからな。

「鈴さん。そんな昔を思い出すような顔をしないで手を動かし……ってちゃんと動いてますね」

今は皿洗いをしているところだ。お客さんが来ないから皿洗いしかやることがない。皿洗いぐらいなら考え込んでも手が滑る事はない。そこでさっきチノがボソッと言ったもうすぐ学校ですねと言う言葉を思い出したのだ

「学生の時の春休みを思い出してな」

「鈴さんは学生の時春休みをどんな風に過ごしていたんですか？」

「……本読んだり、お菓子作ったり、後は実家に戻ってよみと遊んだり、店を手伝ったり」

「何とも鈴さんらしいですね」

チノは納得したように頷くとため息を１つつく

「お客さん来ませんね」

「そうだな。ここの店の経営は大丈夫なのか？」

「それは問題ないです。父のバータイムが盛況なので」

「そうか……」

バータイムがここの収入源なのか。まあ。朝と昼しかここにいないからな。

カラーンコローン

とドアのベルが鳴る

入ってきたのは旅行鞄を引いている高校生位の女の子。

「あれ？あれ？」
女の子は机の下を覗いたりして何かを探しているような素振りをする
「いない！いない！」
だからなにが居ないんだ？俺はチノの方を見るが何とも反応に困っているようだった。
女の子はそんな俺達の反応などお構い無しに何かを探してる
「いない！いない！うさぎがいない！」
うさぎ？
「「……なんだ？この客」」

「鈴さん。接客お願いします」
そう言うとチノはそそくさと頭のティッピーを揺らしながらコーヒーを入れる準備をする。
「ちょっと待てよチノ」
「ファイトです」
「何だと」
仕方ない。行こうじゃないか。よみが俺の足を軽く叩いて励まして俺の頭に乗ってくる
俺は女の子の所に行き注文を聞く事にする
「ご注文はお決まりですか？」
俺がそう聞くと少女はうーん考えると俺の頭とチノの頭を指差し
「うさぎとねこ！」
「猫は非売品です。うさぎは？」
「なに言ってるんですか。非売品です。」

といつの間にかお盆を持ったチノがこっちに来ていた
少女はがくーんとテーブルに伏せたかと思うと急に起き上がり
「それならモフモフさせて!!」
俺はチノの方を見る。チノもこっちを見る。俺は小声で任せたと言うと
「コーヒー一杯で一回です」
「それなら三杯!!」
少女がそう言うとチノはコーヒーを入れるためにカウンターに行く。俺は特にやることがないので下がろうとするが
「店員さん。店員さん。コーヒーが来るまでお話ししよ?」
と少女が言う。この少女のコミュ力を数値化するとどうなるのか。俺気になります!はい、きもいですね。止めます
「いいですけど……」
「ねえ、ねえ。頭に乗ってるねこちゃんをなでなでしてもいい?」
俺はよみに視線を向ける
「にゃーー。にゃにゃ」
仕方ない。なでさせてあげるとのことだ。俺は頭を少し下げるとよみがテーブルの上に跳ぶ
「わあー。すごーい」
「コーヒー三杯なのでうさぎとねこで1，5回の権利です」
「えー。それはずるいよー」
と少女はほっぺを膨らます。
「それなら後三杯頼めばいいと思いますよ?」
「さ、流石にお金が……。仕方ない我慢するよ」
そう言って少女はよみを撫でる。
「うわー。毛がさらさら。気持ちいいー」
「毎日ブラッシングしてますから」
「そう言えばこの子の名前は何なの?」
「よみです」
「そっかあー。それじゃ!店員さんの名前は?」

そこでこうくるとは。こいつコミュ力が高すぎる。天然なのか？
「はあ。猫屋敷　鈴です」
「おお。猫屋敷って珍しい名字だね！私は保登　心愛。よろしくね！鈴君」
「よろしく。保登」
「ココアでいいよー」
「はあ。よろしくココア」

突然の自己紹介タイムが終わるとチノが３つコーヒーを持ってきた
「お待たせしました」
「わーい。三杯頼んだから、１，５回モフル権利があるよ！」
「１．５回？」
チノが首を傾げているので説明をする。
「なるほど。そう言うことでしたか」
「わーい。もふらせて！」
「コーヒーが冷める前に飲んで下さい」
「うーん。それもそうだね。」
そう言ってココアはコーヒーを手に取り飲む。
「この上品な香り！ブルーマウンテンだね！」
「それはコロンビアです」
「この酸味。キリマンジャロ」
「それがブルーマウンテンです」
「この落ち着く味。インスタント」
「それは家のオリジナルブレンドです」
あえなく利きコーヒーは撃沈だった。ココアはそれから落ち着いて外を見ながら飲んでいた。
「ふう。飲み終わったからもふらせて！」
ココアはそう言って両手を広げる。チノは約束だからと頭のティッピーを両手で抱えココアに渡す

「わあーい。モフモフだー！」

モフモフ。モフモフ

「ノオーーー」

「あれ！今何か声がしなかった？」

「気のせいです」

モフモフ。モフモフ

「いけない。よだれが」

「やめろーー。やめるのじゃー」

「やっぱりダンディーな声で拒絶された!?」

「私の腹話術です」

「え？でも…」

「腹話術です」

「凄いね。チノちゃん」

そうしてティッピーをもふること数分

「鈴君、チノちゃん。私ねこの春からここにある高校に通う事になるんだけど」

「お、おう」

「それがどうしたんですか？」

急な話題転換だな。それがどうしたんだ？

「下宿先を探している途中に迷っちゃって。そこで休憩がてらここによったんだけど……。香風さんのお家知らないかな。地図だとここら辺なんだけど」

香風ってチノの名字だよな。

「香風は家ですよ」

「え！これは奇跡を通り越して運命だよ！」

「ほとんど同じだろ」

「私はここのマスターの孫でチノと言います」
「よろしくね！チノちゃん。私はココアだよ！」

凄いな。名前で名のることで名字で呼ぶと言う選択肢を消している。まあ、天然だろうが
「所でマスターはどこかな。挨拶をしたいんだけど」
ココアがそう言うとチノは顔を曇らせて下を向く
「祖父は去年……」
「チノちゃん……」
もしかしてあのダンディーな声は祖父なのか？俺はティッピーの方を見るとぷいと顔を逸らされた。あっ。これあたりだわ
「チノちゃん！私をお姉ちゃんって呼んでいいからね！」
「え？」
ココアがいきなり抱きついて驚いている。天然だけど悪い奴ではないんだな
「ほら、おねーちゃんって」
「こ、ココアさん？」
「おねーちゃんってよんで？」
「ココアさん。暑苦しいです。離れて下さい」
「うう。鈴君。チノちゃんがお姉ちゃんって呼んでくれない。私には姉力が足らないのかな」
「姉力ってなんだよ」
新しいな。コミュ力みたいなものか？
「それより。下宿ってことはココアはここで暮らすのか？」
「そうだよー。学校の方針で下宿先でご奉仕活動もするんだよ！」
「つまりアルバイトをするのか」
「でも家事は私1人で何とかなってますし。従業員も足りてますし」
「まあ。人は多いに越したことないだろ？」
「まあ、それもそうですね。制服を渡すのでついて来て下さい。鈴さんは店をお願いします」
そう言うとチノはココアを連れて二階へ上がって行った

「ふう。よみ。ｒａｂｂｉｔ　ｈｏｕｓｅがこれから賑やかになるな」
「にゃーん」

ココア達が降りてくると制服に着替えていた。ピンクと言うのが何ともココアのイメージに合っている。ああ。脳内お花畑と言ってるわけではない。
「って。リゼ。お前居たのか？」
「初めから居たぞ。ただ知らない気配がしたからロッカーに隠れていたんだ」
「気配って……。よくそんなの分かるな。それでココアに見つかったのか？」
「ああ。完璧に気配を消したはずなのに。やはり軍の人間か？」
「いや。違うから」

恐らくリゼがココアの事をガン見していたんだろ。それでココアがその視線に気づいてロッカーを開けたら中にリゼがいて拳銃って流れか？もう段々読めてきたな

「こちら。バイトのリゼさんです」
「リゼさん。こちらは今日からバイトにはいるココアさんです。先輩として色々教えてあげて下さい」
　チノがそう言うとリゼは嬉々とした表情で
「そうか！私が教官か！」
「よろしくね！リゼちゃん」
「貴様！言葉の最初と最後はサーをつけろ！」
「サー。落ち着いて！サー」
「リゼ。サーは男の上官に付ける敬称だぞ」
　こうしてココアがバイトに入った

「取りあえずリゼさん。ココアさんと一緒にコーヒー豆を取ってきて下さい」
「ああ。行くぞココア」
「いってらっしゃい」
「お前もこい！鈴」

そう言うとリゼは俺の服を首もとを引っ張って連れて行く

「待ってよリゼちゃん。鈴君！」
「おっぃ。首！首絞まってる。取ってくる前に俺の魂が死神に取られる！」

「よし！着いたぞ」

リゼは薄暗い部屋の中に入るのをついて行くと中にはコーヒー豆が沢山あった

「すごいな。」
「よし！これを上まで運ぶぞ」
そう言うと俺とココア、リゼが袋を持つ。リゼと俺が大きいのを二つ持つ
ココアはというと
「こ、これ重いね。普通の女の子なら一個持つので精一杯だよー」
俺はその台詞と共にリゼを見ると大きな袋を1つ落としもうひとつの袋は持ち上げようとする仕草をする
「そ、そうだな……普通の！女の子にはきついよな」
「普通なら軽々しく二つも持たないぞ。俺でも結構キツいのに」

「う、うるさいな！お前にはデリカシーという物がないのか！」
「ふっ！あるわけが無かろう！」
「自信満々に言うな！」
　このやりとりを見て
「リゼちゃんと鈴君仲いいんだね！私も早く仲良くならないと」

　そう言うとココアは大きいのを下ろし小さい袋を持つリゼもそれに習って小さい袋を持つようだ。
　リゼは小さい袋を４つほど持つが
「こ、これも1つ持つのがやっとだね…リゼちゃん」
「え？あっそうだな！」

　この一幕でリゼは普通の男の2、3倍の力は持っていると推測が出来た

　コーヒー豆を補充しても客は来ない。のんびりとした時間が流れる

「ココア。メニューだ。覚えとけ」
　リゼはそう言ってココアにメニューを渡す
「うわあ。コーヒーって沢山種類があるんだね。メニューも多いしすぐには覚えられないよ」
「そうか？私も鈴もすぐに暗記したぞ？」
「す、凄いね2人とも。はあ。私も何か特技があればなあ～」

　ココアがそう言うとチノの方に目を向ける。
「チノちゃん。なにやってるの？」
「春休みの宿題です。空いてる時間にコツコツやっています」
「へぇー」
　ココアが宿題を覗き込む。俺も見てみると数学のページだった。
ほうほう。えーと答えは

「チノちゃん。そこの答えは１２６でその次は３８５だよ！」
「「え？」」

ウソ……だろ。俺は文系だが理系が苦手というわけではない。ココアに暗算で負けるだと……

「ココア。３５０円のコーヒーを１２杯頼んだらいくらだ？」
「え？４２００だよ。はあー。私にも特技があったらな」

無、無自覚って怖い

「ココア。見た目バカっぽいのに……」
「ひ、酷いよ鈴君。これでも私、理系なんだよ！」
「「意外すぎる！（ます！）」」

ココアの予想外な一面に驚きつつ今日のバイトは終わるのだった

ＳＩＤＥ　　Ｂｙ???

「あれ？おかしいな。手紙だとここら辺何だけど……。誰もいない。息子さんが居るって書いてあるのにな。仕方ないから今日はどっかに泊まろう」

突然の来訪者

ｒａｂｂｉｔ　ｈｏｕｓｅにココアがバイトに入り、４月に入いると桜が本格的に咲き始める

ココアはもうすぐ春休みが終わることを悲しんでいたがチノはそうでもなさそうだった。同級生の顔が見たいのだろう。同い年の友達は作っていた方がいいと思うよ。俺の場合、同級生って年上だし。同年代の友達は作れるときに作った方がいい。重要だから二回言った

まあ。人の心配するより自分の心配しろって感じだけどね。

「はあ。眠い。研究所に居たときより起きるのは遅いけど眠いものは眠い」

俺はそう言いながらいつも通りの朝食を作る。やっぱり朝はパン。パンですよ奥さん。

心の中でパンの宣伝をしながらモチモチパンを食べコーヒーを飲む。はあ。こんなにゆっくりとした朝を迎えられるとは……素晴らしい。

俺はカウンターから外の様子を見るとサラリーマン達が会社に行くためにせっせと走っていた。俺の少し前まであれに加わって居たんだよな。そうみると何だか懐かしさが出てくる。あっ。職場に未練はありませんよ？研究者は今はコリゴリです。

流れゆく人ごみの中、１人の影がこの店の前に止まりコンコンという音が聞こえた。

「なんだ？」

俺が居るから店がやってると思ったか？でもｃｌｏｓｅの方に替えたからそれはない。なら道案内だろう。

この時期観光の人はそれなりに多いはずだ。何せうさぎが多くいるのだからうさぎ好きにはたまらない観光地だろう。何ならｒａｂ

ｂｉｔ　ｈｏｕｓｅに案内しよう。ダンディーな喋るアンゴラウサギが居るからな。
俺はドアを開けると女性。まあ、高校生だけど。大体１５０後半。薄緑色の髪に赤色の目。その子が手に紙を持ち店の前に立っていた。
「どうかしましたか？」
取りあえず理由を聞かねば始まらない。
後俺が敬語なのは接客業と言うことの前に基本的に年上が話し相手だったこと。単純に俺が砕けた言葉を話すのに時間がかかるからだ。
まあ。嫌いな奴は基本敬語だよね
「あの。ここは猫屋敷ですよね？」
「はい？」
猫屋敷？名字もそうだし、ここが猫屋敷と呼ばれても違和感は無いけど。
俺の返事が気の抜けたものでどうやら説明が足らない事に気づいたと言うより色々省略し過ぎた事に気がついたようだ
「すいません。言葉が足りませんでした。猫屋敷さんのお宅はこちらですよね？」
「そうですけど……。家に何かようですか？」
俺には誰かが。それこそ客以外は家には来ないはずだ。この客が今は休業状態の為来ないため来客はゼロだ。どんなようだ？心当たりがまるでない。
「あれ？おかしいな……。手紙にも後は息子が何とかするって書いてあるし、特徴も合ってるからここでいいと思うんだけど。僕が地図読み間違えたのかな？」
「すいません。その手紙見せて貰ってもいいですか？」
「はい。どうぞ」
俺は少女から手紙を受け取り中身を見るとそこには身に覚えのある字体と俺の親の名前。猫屋敷　香織の文字があった。内容は家の地図と俺の特徴。何でこの子がここに居る理由はわからない。
そしてその手紙の最後には同封したもう一つの手紙は息子に渡し

てくれと言うやな予感しかしない文があった。
「恐らく。いや、間違いなくこれは親から俺に充てた手紙です。同封されているもう一つの手紙を見せてくれませんか？」
「これです」
少女は鞄から手紙を出し俺に手渡す。俺はその手紙を開く。初めに目には入ったのはただの真っ白な紙だった。
はあ。またこれか。つまらないことするなと言うより間違えて開けたときの配慮とも取れるけど。
少女は俺に当てられたら手紙を見ようと背伸びをして俺の横やから見ようとする。
少女は中を見て白紙だと気づき首を傾げる
「白紙？でも同封されてたのはそれで間違ないですよ」
「大丈夫。分かってるから。取りあえず中に入って。コーヒー飲んで落ち着いてから話そう」
俺は少女を中に入れて席に座らせるとカウンターに行きコーヒーを入れる。
チノのコーヒー教室のおかげで素人の俺でもなかなかのものが入れられるようになった。
俺は何時もの工程を行い少女にコーヒーを出す。
「どうぞ」
「あ。ありがとうございます」
少女は少しコーヒーを口に入れると顔をしかめる。
もしかしてまずかったか？この少女がコーヒー党ならチノに美味しいと言わせるのと同じだ。
「あの。美味しいくなかったでしょうか？」
「い、いえ。そう言うわけではないんです。私猫舌なんです」
少女はあははと笑いながら頭を少しかく。
確かに猫舌にはコーヒーの温度は熱いだろう。次に来るときには飲みやすい温度にしてから出してあげよう。
「美味しいですね。このコーヒー。コロンビアですか？」
「正解です」

マジの人じゃないか。この子すげー。尊敬する。
「え？コロンビアなんですか？」
少女はキョトンとした顔で俺に聞き返す
「そうですよ」
少女はポカンとして
「感で言ったら当たってしまった」
「感かよ」
ちょっと俺の尊敬返してくれよ
その後は少女は静かにコーヒーを飲み終わるのを本を読んで待っていた。
「手紙は読まないんですか？」
「出来れば読みたくないかな。このタイミングで来る手紙にろくな事が書いてあった試しが無いんです」
「例えばどんな事が？」
俺は思い出す。
「手紙ではなく会話なんですが、父親が帰ってきたら突然明日からエジプトでミイラを研究する事になった。エジプト行くぞ。寝床は勿論ピラミッドだと物凄いいい笑顔で言ったのを覚えてます。まあ、実際はちゃんとした場所で泊まりましたけど」
「何というかエキセントリックなお父さんですね」
少女は苦笑を浮かべたあと
「でも、ちゃんと見ないとダメだと思いますよ」
と優しげな笑顔をうかべる
「それもそうか。ちょっと発狂しそうになったら後はよろしく頼む」
「内容がハード過ぎると思うんですが……」
俺はカウンターからライターを取り出す。そして火が出ることを確認した後に手紙に……
「てちょっと何やってるんですか！火事になりますよ！」
少女は慌てた形相で俺の方に詰め寄る
「あ。すまん。これ火炙りして読むんだよ」
「え？」

「毎回親が遊び心でやってくるんだよ」
「そうだったんですか。すいません急に声をあげてしまって」
「気にしない下さい。それでは改めて」
俺は少女に見えないように隠し、不穏な空気のある手紙を火であぶる。そして浮かび上がった手紙で初めに目に入ったのは
『ごっめーん。女の子が下宿しに来るの忘れてた！』
という何とも軽い一言だった。
「は？」
おいおいこいつは予想外だ。この婆は俺の想像の斜め上を平然と行きやがる。憧れもしないし、格好良くもないからお願いです。自重して下さい。
俺は心配そうな目をする少女を見て流石に不味いと考えた。心を落ち着かせ……
『テヘペロ！』
「られるか！あんたの黄金期はもう２０年前に終わってるわ！」
「きゃ！お、落ち着いて下さい」
どうどうと宥めるように俺を落ち着かせようとする。
「はっ！すいません。取り乱しました」
『全く。女の子を驚かせるんじゃないよ』
誰のせいだ。誰の
『あと私の黄金期はまだ終わってないよ』
エスパーか？この婆。いや。エスパーより魔女の方がいいな。老婆の魔女
『あんた。帰国したら覚えときな』
マジで魔女だ
『それじゃ、後は頼んだ。その子が行く学校は下宿先の家に奉仕活動をする事になっているから人手が足らないなら手伝って貰いな。
ｐｓ　同意の上で襲えよ？　』
「意味分からんわ！」
俺はこの手紙が少女に見られないように復元が不可能なレベルま

で破く
「ちょっと。なにやってるんですか！」
少女が止めようとするも時はすでに遅い。もう修復が不可能なレベルまで破った。
「ちょっと極秘事項があるんだ。だから見たら破いて捨ててくれと書いてあったんだ」
「まあ。そう言うことにしておきます」
納得してないようだがあの手紙は流石にダメだ。襲うとかもうアウト。スリーアウトでチェンジするレベル

「取りあえず事情は分かった。俺の母親が忘れていて俺の方に連絡が来てなかったようだな。」
「そうだったんですか」
「まあ、こちらの不手際だ。下宿してもいいぞ」
「ありがとうございます。よろしくお願いします。五十嵐　乃亜です。ノアでいいですよ」
そう言うと少女は頭を下げる
「猫屋敷　鈴だ。それなら俺も鈴でいいぞ。後敬語もなしでいい。疲れるだろ」
「わかりま、じゃなくてわかったよ。鈴さん」
「それじゃノア。君を猫の隠れ家のホール長に任命する」
「え!?いきなり過ぎる！流石に無理かな！」
「落ち着け。何も初めからポーンと放り投げる分けじゃない。ちゃんと1から教えるから安心しろ」
「むう。まあ、それなら何とか。でも何で僕の行く学校で奉仕活動するってことを知ってるのかな?」
「手紙に書いてあった」
「ま、まさか実は私が来ることを知っていて調べたのかな!?」
「んなわけあるか。あの取り乱しよう見ればわかるだろ」
「それもそうだよね～」

こやつ第一印象と変わりすぎだな。まあ、おもしろいし悪い奴ではなさそうだしいいや。
そう言えば奉仕活動と言えばココアの学校もしているよな。ということは同じ高校ってことか。それはそれは何とも偶然。
春休みが終わる前にココアに紹介してやろう。もっと面白くなるぞ。
「それじゃあ。荷物はそこのｓｔａｆｆ　ｏｎｌｙのドアを開けて階段上がって左の奥な」
「はーい」
そう言ってノアは自分の部屋へ荷物を置いていく。するとノアと入れ替わりで猫用のドアが開いた。
「よみか。縄張りの見回りは終わったのか？」
「にゃん」
そう言うとよみはフェンスを飛び越えてこちら側に来る。客が来なければこんな事はやらないがな。
「そうだ。新しい下宿の店員が入ったぞ。ココアと同じようなものだ」
「にゃ。にゃーん」
と言う何ともいやそうな鳴き声を上げる。初対面以来ココアはよみに避けられている。満足も触らせない。そのたびにココアは泣いてチノをもふるかティッピーをもふってもふもふ成分補給とか言っている。
後俺がよみを撫でる度に羨ましそうな顔をするのはやめてほしい。やりにくいんだ
「安心しろ。ココア見たく突発的にナデナデはされないと思うから」
「にゃー」
そうだといいなと人なきするとノアが降りて来た
「わ。猫だ！ロシアンブルーだ！さわってもいいかな!?」
降りてドアを開けてよみを発見した瞬間に満面の笑みになると言う愛猫家。まあ、ココアよりはましだろう。たぶん
俺はよみに視線を送る。よし。

「オッケだって。でも軽く撫でてだって」
「にゃーーん!?」
「やった!うわっ!逃げないでよー」
そう言ってノアとよみの鬼ごっこが始まる
本当は時間を稼いで。その間に私は逃げると言っていたのだが。
あの表情を見て触らせてあげないと言って断れる男は居ないだろう

「さて。ここも賑やかになるな」

カウンターから1人と1匹を見る
猫の隠れ家にも春の風がやっと入ってきたような気がした

ついでにノアは俺が結婚していると勘違いしていたようだった。
俺はそらしたかった現実を白状し独身かつ年も3つしか離れてないと言った。

そのあとどうなったのかはご想像に任せる。

家の猫も羊羹を食べるらしい

衝激の騒動が合って2日の時間を引っ越し作業に追われた。ノア曰わく明日から学校だそうだ
「と言うわけで鈴さん。学校まで案内して下さい」
突如朝ご飯を食べている席でそんな事をお願いされる。普通、学校を案内する事は出来るんだろうが……
「ごめんなさい無理です」
「まさかの即答!ちょっと待ってよ。困りるんだよ!明日僕はどうやって学校にいけばいいのかな!」
割といや、ガチで慌てている。俺以外に知り合いが居ない今、俺が頼みの綱なんだろう。
「知らないよ。俺はバイト先と家の往復、それ以外は必要最低限しか知らない。ましてや一番関係ない学校何か知るわけないだろ」
生粋の家好きの俺が、ましてやリゼに引きずられなければこの街を知る気がさらさらなかった俺が知るわけがない。
「う、嘘だよね?」
「アハハハ」
「笑って誤魔化さなくてもいいかな!?ほ、本当にどうしよう……」
と言うかネットで検索という手を使わないのか?俺の部屋にもパソコンはあるし今の時代スマホ、あるいはガラケーぐらいは持っているはず。そのことを言うと
「今は持って無いんだよ。忘れて来ちゃって」
「おいおい。現代人の必需品を忘れてどうする」
「そうなんだよ。忘れちゃったからさ。調べようにも無理なんだ」
ここであることを思い出す。そう言えばノアはココアと通う学校が同じであると。ココアの方がここに居る時間は長居し流石に学校ぐらいは知っているだろう。寧ろこの前日に知らないと言うのはまずい
「む、何か馬鹿にされたような気がするかな」
感のいいやつだ。

「そんな風に言うと学校の場所を知っているやつを教えないぞ」
「え、本当ですか!?良かった。これで初日から遅刻は間のがれる……」
「多分知っているはず……」
「最後に余計な一言をつけないでよ！」
「さーて。食べ終わったしレッツゴー」
「待つかな！」

★★★★★★

取りあえず、ｒａｂｂｉｔ　ｈｏｕｓｅに向かう。ココアの事だし今日もチノと居るだろう。リゼは今日から学校らしいが。
「それで鈴さん。僕達は今どこに行こうとしてるのかな？」
「俺のバイト先。ｒａｂｂｉｔ　ｈｏｕｓｅってところだ」
「ｒａｂｂｉｔ　ｈｏｕｓｅ？うさぎが居るのかな？」
思考がまるっきりココアだ。いや、俺も始めはそう思ったし、あながち間違いじゃないんだけどさ。ダンディーな声で喋るアンゴラうさぎだが
「それは見れば分かる」
百聞は一見にしかず。見て貰った方が手っ取り早い。
「ここがｒａｂｂｉｔ　ｈｏｕｓｅだ」
俺はドアを開けて中に入る。店内ではチノがコップを洗いティッピーは特等席つまりチノの頭に乗っていた
「いらっしゃいませ……って鈴さんじゃないですか。今日は休みの日じゃないんですか？それと隣の方は？」
「今日はその隣の方の為にここまで来たんだよ」
チノは訳が分からず首を傾げているが取りあえず席に座る
「えっと。まあ、順を追って説明するとココアと同じようなノリだ」
「すいません。順を追っていないどころか略しすぎ何ですが」
確かにそうだ。ごめんなさい。反応が見たかったんです
「そうですよ。鈴さん。それとココアって子が心当たりのある人なのかな？」

「そうだ」
俺がそう言うとノアはチノの方に向くと
「それでこっちの子は初めまして。五十嵐乃亜です。ノアでいいよ。よろしくね」
と頭を下げた。初対面を思い出させるがその時よりも幾分柔らかい。年下でかつ同性だからだろう。
チノは予想外に丁寧だったのか驚いていた。まあ、このパターンはココアとの出会いを思い出すからな。あれに比べれば大分いいだろ
「はい。それではノアさんで。私は香風智乃です。チノでいいですよ」
「それじゃあよろしくねチノ」
「はい。残念ですがココアさんは今学校ですよ?」
「は?」
「今日から学校だよ!とさっき家を出たばっかりです」
俺はどうやらココアを過小評価していたようだ。もちろんマイナス方面に。まさかの日にちを間違える何て……
「はあ。ココア。流石にないわ」
「どうしたんですか?」
「実はノアはココアと同じ高校なんだ」
「え?と、言うことはもしかして」
「簡単に言えばココアは日にちを間違えている」
「はあ。まったくココアさんは……」
チノは本気で呆れているようだった。すまんなココアよ。お前の姉としての評価を下げてしまった。まあ、ドンマイ
「それじゃあそのココアって子はどこに居るんだろうね。見つけないと僕は明日学校を入学早々に休まないといけなくなるんだ。チノ。どこに居るかわかるかな?」
うーんと頭を悩ませる、チノ。その表情は可愛い。見ていて和む。ココアが居ればだきついているだろうな。
「正直。ココアさんの行動はよくわかりませんが……うさぎに釣られてその辺をほっつき歩いていると思います。恐らく一番うさぎが居

る公園かと」
　分からないと言いながら大分的確だと思うよ。
「分からないと言ってるのに大分的確だね」
　一瞬心の声が出たのかと思ったが違うようだった。
「チノはココアって子のことが好きなんだね」
「ち、違いますよ」
　チノはわたわたと手を振り顔を少し赤くする
「そっか。それじゃ大好きなんだね」
「〜〜」
　その言葉がトドメだったのかチノは顔を隠し逃げて行った
　俺はそれを見送ると肩をちょんちょんとされる。
「可愛いよ。チノちゃん可愛い過ぎるよ。何だろうこの何とも言えない高揚感。鈴さんはわかるかな？」
　それは萌えと言うものですと言う言葉を飲み込んだ俺を誉めてくだい
「からかい過ぎだぞ」
「う、つい。それに何時も私がやられることが多いからさ。タイミングがあるとつい。まさかあそこまでの反応は予想外だったんだよ」
　しょんぼりとうなだれるノアだがまあ、うん。少し責任が俺にもあるのか？からかいまくっていたし……まあ、手助けぐらいはするか……
「チノさんやーい。出てきなさい。今出てくれば美味しいりんごタルト作ってあげるから」
　完璧に食べ物で釣っているけど俺にはこれしかない。
「え。それは僕には……」
「あげるわけないだろ。それだったら意味がないからな」
「うっ」
　これは些細な仕返しだ
　チノは出てこない。と言うよりカウンターから顔だけ出している。
「私がお菓子で釣られると思われるのは何かあれですね。鈴さんのお菓子は確かに美味しいですが……なので」

と言うとチノはノアの方を向き
「ノアさんの好きな食べ物は何ですか？」
「え？僕はホットケーキだよ」
無邪気に答えるノア。それを見て俺の方に向く
「決まりました。鈴さんホットケーキを作ってください。ノアさんの前で美味しく食べましょう」
しれっという。チノ！あなた恐ろしい子！はいごめんなさい
当の本人は絶望のどん底に居るような表情だった。
「そんな……」
「これでさっきの事は無かったことにしてあげます」
「う、分かったよ」
「それじゃ。刑も決まったことだしココアを探しに行くか」
「よろしくお願いします」
「……」
大変だ。ノアが戻ってこない。こうなったら大型家電も一発で直せるあれを……はまずいか。取りあえず
「ほい。」
ビシ
「痛い。あれ？私は何を」
「ほら、ココア探しに行くぞ」
「はい……」

★★★★
チノが推理した公園はｒａｂｂｉｔ　ｈｏｕｓｅから数分ぐらい離れている。途中で会ったよみと一緒に歩き公園についた。そこにいたのはうさぎを羊羹で餌付けしようとしている着物少女と着物少女に餌付けされそうになっている見覚えのある人影
「……」
「鈴さん。あれが」
「気のせいだ」
着物少女が何で羊羹で餌付けしてるのかはさておき何でお前が釣

られてるんだよ。おかしいだろ。食い意地張りすぎだ。呆れて若干目が遠くなってるぞ
「鈴さん。目が遠くなってるの隠しきれてないよ。」
　バレたか
「それで何で羊羹で餌付け？」
「俺も聞きたいが逆に何でココアが釣られてるんだよ」
　あっやっぱりと言うノアの声をスルーしてココアと着物少女に近づく
「ココア。なにやってんだ？」
　このなにやってんだには最高に心がこもっていたと思う。いや、ほんとになにやってんだ何だもん
「あれ？鈴くん何でここに!?そして隣の子は!?」
「えーと。まあ、順を追って説明するとこの子は家の喫茶店に下宿する事になった子。要するにココアと同じ学校に通うわけだ」
「え!?ほんとに！やったー！」
　そう言うとココアは目を輝かせてノアの前に行きご機嫌に自己紹介を始めた
「初めまして！私は保澄心愛だよ！よろしくね」
「僕は五十嵐乃亜だよ。よろしく」
「うん！よろしくねノアちゃん」
　こういう場面を見るとココアのコミュニケーション能力の高さが伺える。すげな。流石にあって3秒で友達と言うだけばある。そうやってぼーと2人を見ていると
「あらあら。私が蚊帳の外になっちゃったわ」
　わざとらしく着物の裾で顔を隠し泣いているふりをしている。こやつなかなかやるな
「あっ。ごめんね千夜ちゃん。だから泣かないでー」
　と、ココアは千夜と呼んだ少女をなだめる。あー。こいう反応が面白いんだよな。うん。
「大丈夫よー。ココアちゃん。嘘泣きだから」
「えー。千夜ちゃんひどいよー」

「ごめんなさいね。ココアちゃんの反応が面白いからつい」
　すごいね。どんぴしゃで同じ事考えてたよ
「でも私も嬉しいわ。今日だけで同じ学校に通う友達が2人いるって分かったし」
「あれ？それじゃ千夜ちゃんも？」
　期待の視線が千夜を貫く。
「同じ学校よ。よろしくねココアちゃんノアちゃん」
「僕も自己紹介が遅れたけどよろしくね千夜」
「やったね！これでトリオが結成出来るよ！」
「あら、ココアちゃん。それなら漫才でもやる？」
「やろうやろう」
「無理だ。鈴さん。僕はこの2人についていけそうがないよ」
　頑張れ。その言葉しかでない。まあ、まずは
「ココア。今の流れで不思議なことは？」
「ん？うーんと。よみちゃんが頭じゃなくて肩に乗ってる！」
「不正解。2人の服装に着目」
　俺がそう言うとココアはノアと千夜を凝視する。上から下へ。また上へ。
「あれ？何で2人とも制服じゃないの？」
　やっと本題にはいれたよこんちくしょう！
「え？何でってね。千夜」
「そ、それは……ね。ノアちゃん」

　千夜の目が泳いでいる。あれは知っていたけど黙っていたな
「「今日は入学式じゃないよ」」
「え？」
　ココアは固まる。千夜固まる。ノアも固まる。俺は踊る……
はい。この空気で踊りませんよ
　こう着する事数秒。千夜がこの空域に耐えられなくなったのか
「ごめんね！ココアちゃん！私が……早く言っていれば……」
「大丈夫だよ！千夜ちゃん。気にしないで！」

「コ、ココアちゃん！」
「千夜ちゃん！」
　と言うと２人はヒしっと抱き合う。
「鈴さん。この２人はさっきが初対面だよね」
「そうだろうな」
　出なければココアが羊羹て餌付けされてるところは見られないし
「大丈夫かな……僕」

　ちょっと自信を喪失しているノアを横目に千夜とココアは包容が終わったようだ。すると千夜がこちらを向いてきた
「所でさっきから気になっていたんだけどそちらのお方は？」
　ついにこっちに矛先が向かってきた
「初めまして。ｒａｂｂｉｔ　ｈｏｕｓｅの新入りバイト兼猫の隠れ家の店主代理です」
　一様礼儀として軽く会釈をする。洋服が着物だし羊羹を持っていたからもしかしたら同業者だろう。
　そう答えると千夜はあら？っと言う感じの表情で
「あの店は一時閉店って聞いたのだけれど……」
「そこを切り盛りしてる破天荒夫婦の息子です。幸か不幸かタイミングが重なって代理と言うわけです」
「そう言うことね。私は甘兎庵の宇治松千夜よ。よろしくね猫屋敷くん……長いから猫くんでいいかしら？」
「流石にそのあだ名は拒否するよ？松さんや？」
「うふふふふふ」
「あはははははは」

「す、すごいよノアちゃん。あの２人の間に火花が見えるよ」
「もしかしたら性格が似てるのかも。人をいじるのが好きって言う」
　絶対に負けられない戦いがここにある。
　笑顔の応酬はさっき沈黙より長く続いたが
「もう。２人ともケンカはよくないよ！」

といって終わった。
「大丈夫よー。ココアちゃん。これはケンカじゃないから。ね。猫くん」
「そうだな。これが俺たちのコミュニケーションってやつだ。なあ、松さんや？」
「もう、いい加減にしないと私もおこるよ！」
「はあ、ほんとに似たもの同士だね」

２人から呆れての声を頂ましたー
「そうね。仲直りの印に同盟をしましょう？鈴くん」
「同盟？おもしろそうだな千夜」
内容は簡単に想像できる。
「２人でいじり倒しましょう（か）」

「良かった。これで一件落着だね」
「ココア。寧ろこれはやっかいごとが増えたと思うんだけど……」

最悪のタッグの誕生が誕生し被害者が徐々に増えるのはまた後の話

「ねえ、鈴くん。さっきから肩にのっているのは鈴くんの飼い猫？」
「そうだぞ。ロシアンブルーのよみだ」
「あらあら。ねえ、よみちゃん羊羹食べる？」
そう言うと両袖から４つの羊羹を取り出した
「食べないだろ！普通動物は！」
「千夜。その着物に何本羊羹仕込んでるのかな？」
「そうなの？家のあんこは食べるけど……」
「たべちゃうの！」
驚愕の真実。ボケてる節はないから事実だろう。
「なるほどだからさっき羊羹でうさぎを餌付けしようとしてたのな」
「釣れたのはココア立ったけどね」

「うう。だって美味しそうだったんだもん」
そう言ってココアは涙目になりさっき千夜が取り出した羊羹に視線がいく
この時に食い意地張りすぎだ太るぞと言わなかった俺を誰かほめて下さい。いない？ですよね
「ココアちゃん。はいもう一本あげる」
「え！いいの？」
「あんなに美味しそうに食べられたら羊羹もうれしいでしょ？それに作った私も嬉しかったから」
「わーい。ありがとう千夜ちゃん」
羊羹を貰うとぴょんぴょんと跳ねる。心がぴょんぴょん……。はい。
「ノアちゃんもどうぞ」
「ありがとう千夜」
「鈴くんもどうぞ。美味しくて驚かないでね？」
余程自信があるのか千夜は物凄くいい笑顔だった。
俺は包装を開けて食べようとすると
「にゃーん」

と言う一鳴きでよみが羊羹を食べた

「「え？」」
「まあ。猫ちゃんもようかん食べるのね」

普通は食べない。と言う言葉が疑問に思った。ついでに家の猫は羊羹を食べられるらしいと今日分かった

後。ココアも実は道が分からずに迷子になっていたことが判明し千夜が２人を案内することになった。しかし帰り際に案内したのが中学校だったことに気づいた千夜が慌てに慌てに最終的に３人一緒に行くらしい。

めでたしめでたし？

その子はうさぎが怖いようです

それぞれ学校に通うココア、チノ、リゼ、チヤ、ノアを裏腹に俺は月水金はｒａｂｂｉｔ　ｈｏｕｓｅに火木はノアと共に猫の隠れ家を回していた。始めの客足は何とも言えなかったが徐々に伸び繁盛とは言わずとも赤字にはなっていない。何とも不思議だ。

今日は木曜日。つかの間の休憩を取りノアが来るまでの時間を待つ。今日は何やら実力テストがあるらしく帰るのは何時もより遅く４時頃らしい。それでも早いぞ。社会人になったら……思い出したくもない。あの残業地獄。と言うわけで何時もよりゆっくりコーヒーを飲み俺の膝に乗っかってるよみを撫でながら幸せってこの時間の事なのかと微睡んでいた。

このまま眠ってもいいかなー。帰って来たノアに起こしてもらえはいいかなーと思って机に腕を置きそこに頭を乗せようとすると

「いやーー!こないでーーー!」

と叫び声が聞こえた。女の子の声だ。若干泣きそうなのを堪えてるのか涙声でありよほどその女の子が近くにいるのか大きく聞こえた。俺は起き上がりどうしようかと頭を上げたがいつの間にか膝から降りたのか、よみが俺のズボンをタシタシと猫パンチを放ち、ほら行くよとでも言いたげであり俺はそれについて行くのだった

悲鳴から暴漢とかそう言う悪い系のものかと思った。例えそういうものでも不意打ち一発。さっさと逃げればいいと思ってた。しかし俺の想像は百八十度違いうさぎを見てうずくまり半べそをかいている女の子が居るのだから逆にこっちが驚いてしまう。基本的に女の子はうさぎって好きないのか?俺の偏見?と思ったがそんなことよりこの子を助けよう

と言うことで

「いけ!よみ猫パンチだ!」

某アニメ風に言うとよみは俺の方に近寄りポンとズボンを叩き
「にゃん！」
ごめんなさい。ついでに馬鹿な事をしてないで早く助けなさいと言っています。俺は一歩踏み出してうさぎを抱えて回れ右。三歩進んでうさぎを放してやると女の子を少し振り返り去っていった。さて仕事前の一仕事も終わったし帰ろう。十歩歩けばお家だ。と思ったが

「あ、あの！」
俺は振り返ると女の子がこっちを向いていた。
「助けていただいてありがとうございます！」
女の子は頭を下げて礼を言う。うさぎを捕まえただけなんだけど……と思ったが悪い気はしない。何よりもお礼を言えない奴はろくな奴がいない。俺の元上司とかね！
「いえいえ。たまたま家が隣なんで」
「え？」
と俺が指差した方を見る。
「もしかして凄い響きました？」
「凄い響いた。びっくりした」
そう言うとうわーと頭を抱えている。余程恥ずかしいのかもしれんな。
「お騒がせしました」
「何事もなくて良かったよ。もっとも原因がうさぎなのは驚いた」
「うさぎ。怖いんです」
「あー。もしかして噛まれたの？」
「……よくわかりましたね」
「いや。動物を嫌いになる理由のトップスリーには入るりゆうだよ？」
ついでに両親揃ってこの理由で犬がダメらしい。名字が犬屋敷じゃなくて良かったね

「と、取りあえずこれ！お礼です。良かったらきてください。用事があるので失礼します！」

そう言ってはぐらかされ居なくなってしまった。残るのは静けさと手元に残るフルールドラパンのチラシであった

……いかがわしいお店？

とデザインを見て一瞬思ったがよく見るとハーブのお店だった。従業員の皆さん。ごめんなさい

猫の隠れ家の慌ただしい平日　その一

朝五時。俺はやっと慣れつつある猫の隠れ家を開店する準備を始める。実際に店を回しこれが一番良いだろうと言う営業時間を決めた。八時から一時に回して一時間半の休憩を挟み二時半から六時まで回す。午後はたまに客が多く入ることもある。そのためノアが速く帰ってこないと俺は死ぬ。と言うのは半分冗談だ。午後なら一時間だけなら回せる。それまで来なければゲームオーバー。しかし今まで無かったので大丈夫だ。たぶん。

寒さも幾分か和らいできたが上に上着を羽織り、まずはノアの弁当を用意する。ノアに好き嫌いはないから適当にいれてよ！あっでも玉子焼は入れてね！甘いやつ。と言うご所望を受けたので毎朝手作りしている。と言うより玉子焼の冷凍食品何てないから作るしかない。そこから夕飯の残りと隙間に冷凍食品をつめてノアが自前で持ってきた可愛らしい黒猫が歩いている弁当は埋まった。

「完全に今の俺専業主夫だな」

研究者から専業主夫。凄い転職だ。一応ここの代理店主だけど。

弁当を開けておき、冷ましておく為そのまま台所で放置。それから店の整理と清掃に入る。どこに何があるかを再度確認。綺麗な布巾で清掃し清潔を保つ。カウンターとテーブルも拭き、そこから床を掃く。ちりとりで取った砂は外にゴミはゴミ箱に捨てる。猫スペースも清掃し、下準備に集中する。

ピピピピピ。

おっと。ノアがもう直ぐ起きてくるか。さて続きは後にして保存と。朝食の準備を始めますかね。

ノアは俺と同じ朝はパン派。俺らの朝食は大体パン二枚にコーヒーと決まっている。ノアはチーズを乗せコーヒーは猫舌なので冷たいのだけどな。パンをトースターにセット。コーヒーはスーパーで売っているペットボトルのやつを注ぐので急ぐ必要はない。

テーブルに座って少し休憩する。あー。ノアが学校行ったら洗濯物して、また準備して、干して、それで開店までゆっくりするかな……。

にゃーん。あさだにゃー。おきるにゃよー。にゃーんにゃーんにゃーんにゃーん

……毎度聞く度にやる気がそがれる鳴き声。これがノアの目覚ましだ。部屋に入ったことがないので分からないがどうせねこなんだろ。というよりこんな目覚ましでよく起きられると毎度感心する。俺ならば二度寝する。ついでに止めないとにゃーんのところだけエンドレスリピートされるらしい。

「おはよう……鈴さん」

まだ眠いのか目を擦りながらリビングに入ってくる。たまにだが目のやり場に困る着崩れを起こすこともあるが今日は大丈夫みたいだ。安定の緑の猫さんパジャマだ。ふらふらとテーブルに座り半分眠ってるかのような感じでテーブルの上に置いたパンを手に取りカリカリ食べている。俺も自分の分が焼きあがったのでテーブルの向かいに座りパンを食べる。ノアが一枚食べ終わった所で

「やっぱり朝はパンだね～」

「和んでいても良いけど遅刻しても知らないぞ」

「だいじょうぶだいじょうぶ」

ちょっと不安だが……大丈夫か？

ノアと同時に食べ終わりパンを乗せるために使ったチラシはゴミ箱。コップは洗い乾かしておく。よし。洗濯物するか。そう思った時だった。ダッダッとはまでは行かないが何か焦ったような足音。勢いよく扉を開けて

「思い出した鈴さん！鬼畜先生の課題が終わらない！」

「諦めろ」

「はやい！なんか俺がやってやるとかないの！」

「洗濯物あるし」
「僕の優先順位低くない!?」
　さっきの寝ぼけた感じとは違う。恐らく宿題やってないことで目が冴えてｈｉｇｈになってるんだろう。
「宿題なら見せて貰えば？」
「……ココアとチヤがやってきてるとは思えないんだよ。しかも量も難易度も高いし」
「そりゃ。確かに。でもなんでそんなレベルの問題が？」
　俺がごもっともな質問を返すと
「その先生。わりと進路とか受験とかにうるさい先生なんだ。一年でも解けるように変えた大学入試みたいな長文読解をたまに宿題で出してくるんだよ」
「まだ一年に合わせるだけマシだと思うけど。終わってないのか？」
「うん。でもゴールは見えてきた」
「ならいいんじゃない？あたらないでしょ？」
　俺がそう言うとさらに絶望した顔になる。
「その教科先生。出席番号で当てるんだよ。だから確実に僕が当たる」
　……ご愁傷様。
「お願いします鈴様。僕を助けると思ってね？何でもするから」
　何というか言葉の選択に気を使えと言わざるおえない。おい、やめろ。涙目で下から見上げるな。ついうっかりやるって言いそうじゃねーか。はあ。もういいや。
「でなに？課題って」
「これです」
　そう言って出したのはプリント。結構な枚数がある。
「これの日本語訳をノートに書いて後ろの設問といて提出なんだ」
　パラパラと捲ると教科は英語だった。
「これぐらいなら……ノート持って来い」
「え？うん」
　ノアにノートを持ってこさせて机に座らせる。

「一度しか言わないからよく聞けよ～」
俺はその英語の文章を日本語訳する。最後まで読み終わりノアを見ると驚いていた。
「凄い鈴さん！びっくりだよ。こんな所に救世主が」
「少しいじれよ。多分そのまま出すと怪しまれるぞ」
「わかった！これで設問も解けるよ」
「喜ぶのはいいがさっさと支度しろ。遅刻するぞ？」
ノアはテレビの時計を見て慌てて部屋に戻り制服に着替えてドタバタと家を出て行った。
「はあ。準備するかな」